

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03188

研究課題名（和文）攻撃行動の情報処理基盤 攻撃スクリプトの再考と実証的検討

研究課題名（英文）Information processing basis of aggressive behavior:Reconsideration of aggressive script and empirical examination.

研究代表者

荒井 崇史（Arai, Takashi）

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50626885

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、攻撃スクリプトが攻撃行動に及ぼす影響を検討することを目的として検討を行った。研究の結果、研究1では攻撃への潜在的態度が攻撃行動を予測しなかった。これを踏まえ、研究2では刺激を再検討したところ、攻撃概念のネガティブさが低いほど、攻撃行動を行いやすいことが示唆された。研究3では、攻撃行動の測定方法を変更し再検討したところ、攻撃概念がネガティブなほど、被挑発時に攻撃行動をしやすいことが示唆された。研究4では、攻撃的思考を抑制し、攻撃スクリプトが活性化するほど、攻撃的行動を行いやすいことが示された。このように必ずしも一貫しない本研究の結果について、今後、継続的に検討することが望まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、攻撃への潜在的態度が攻撃行動を予測する可能性を有していることを示した。また、攻撃的思考を抑制し、攻撃スクリプトを活性化させることが、攻撃行動を増強することを明らかにした。すなわち、攻撃行動の発現に我々が必ずしも意識しない攻撃スクリプトが関与する可能性が、一部支持された。これらの結果は、既存の攻撃研究に新たな知見を加える点で学術的意義がある。また、本研究の知見は、例えば、潜在的加害者の予防的・教育的介入を考える上で足掛かりになる点で社会的意義がある。ただし、本研究の知見は必ずしも一貫しない部分もあり、攻撃スクリプトが攻撃行動に及ぼす影響は今後の一層の検討が求められる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the effects of aggressive scripts on aggressive behavior. The results showed that, in Study 1, implicit attitudes toward aggression did not predict aggressive behavior. Based on these results, in Study 2, the stimuli were reexamined, and it was suggested that the lower the negativity of the aggression concept, the more likely the participants were to engage in aggressive behavior. In Study 3, the measurement method of aggressive behavior was changed and reexamined, and it was suggested that the more negative the concept of aggression was, the more likely the participants were to engage in aggressive behavior when provoked. Study 4 showed that suppression of aggressive thoughts leads to activation of the aggressive script, which in turn promotes aggressive behavior. The results of this study, which are not always consistent, should continue to be examined in the future.

研究分野：社会心理学

キーワード：暴力 攻撃行動 攻撃性 攻撃スクリプト 潜在的態度 潜在指標 衝動システム 熟慮システム

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

我々の多くは、暴力を振るってはいけない、他者を侮辱するのは悪いことと理解している。しかし、社会から攻撃行動や暴力が無くなる兆しは見えない。例えば、児童虐待や Domestic Violence (DV), Dating Violence (DaV) など、親密関係に起因した攻撃行動や暴力の問題は世界的にまん延した問題であり、現代において解決すべき喫緊の課題である。また、日本でも、この数年間、刑法犯認知件数は大幅に減少しているが、攻撃行動や暴力に関連する殺人、傷害、暴行の認知件数は微減もしくは横ばいである。攻撃行動や暴力を予防し、矯正教育により再犯を防ぐためには、なぜ攻撃行動や暴力が生じるのか、その発生過程を解明することが必要である。

こうした背景のもと、本研究では、攻撃行動や暴力に関連する情報処理過程に注目する。我々の社会的行動は何もない状態から生じるのではなく、入力情報を手掛かりとした情報処理の結果として生じる。同様に、攻撃行動も社会的行動である以上、我々が攻撃行動や暴力に至るまでの過程には、認知的な情報処理過程が存在している。したがって、この情報処理過程にアプローチすることが、攻撃行動や暴力の根本的解決には必要である。これまで、攻撃行動や暴力の文脈では、こうした情報処理過程の理論モデルは提案されてきたが、実証的検討は必ずしも十分ではなく、ブラックボックス化されてきた。

こうした視点から、本研究では攻撃行動や暴力の情報処理過程として、攻撃スクリプトに目を向ける。スクリプトとは、日常的に繰り返し経験される事象を、その事象を成り立たせている一連の出来事として表象したものである。我々が日常生活を営む上でスクリプトが果たす役割は大きい。その反面、不適応的なスクリプトは問題行動を招くことがある。特に、攻撃行動や暴力については、行為の発現にスクリプトが関与する可能性が 1980 年代半ばから指摘されてきた (例えば、Huesmann & Eron, 1984)。こうした立場では、葛藤状況における攻撃的な行動パターンがスクリプト化され、次に同様の状況に遭遇した場合に攻撃行動や暴力がスクリプトに従って自動的に発現すると想定する。しかし、攻撃スクリプトが実証的に検討され始めたのは比較的近年である (Gilbert & Daffern, 2017)。例えば、Gilbert とその同僚たちは、一般人のみならず、受刑者を対象に一連の研究を行い、攻撃行動や暴力の情報処理として攻撃スクリプトが関与する可能性を指摘している (例えば、Gilbert & Daffern, 2010)。一方、日本では、大淵 (1993) などが攻撃行動の発現機構として攻撃スクリプト理論を紹介するに留まっており、実証的検討は皆無である。

そこで、本研究では、日本において、攻撃行動や暴力の発現に情報処理過程、すなわち攻撃スクリプトがどのように関与するのかを解明することを問いとして、一連の研究を行った。特に、本研究では、従来からの顕在レベルでの測定に加え、潜在レベルでの測定を行うことで、攻撃スクリプトが攻撃行動や暴力を予測し得るのかどうかを検討した。

### 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究の全体的目的は新旧の測定手法を用いて顕在・潜在レベルから攻撃スクリプトを測定することで、攻撃スクリプトが攻撃行動の発現に及ぼす影響を検討することとした。全体的目的を達成するために、本研究では以下の 4 つの研究を実施した。

### 3. 研究の方法

**研究 1:** 研究 1 では、攻撃スクリプトの顕在測度を網羅的にレビューするとともに、潜在的測度の暫定版の刺激を用い、攻撃行動を予測できるかどうかを検討した。

(1) **実験参加者:** 大学生・大学院生 30 名。これら対象者を、怒り喚起操作のある挑発条件 16 名 (男性 8 名、女性 8 名、平均年齢  $22.56 \pm 1.37$  歳)、怒り喚起の操作がない統制条件 14 名 (男性 8 名、女性 6 名、平均年齢  $22.36 \pm 1.11$  歳) にランダムに配置した。

(2) **実験手続き:** 実験に先立ち、攻撃スクリプトに関する潜在的態度を測定するための刺激の選定を行い、マウストラッカー課題の刺激語の選定を行った。本実験では、参加者が実験室に到着後、実験内容や倫理的配慮について書面と口頭で説明を行い、実験参加への同意を得た。その後、実験参加者に単語の分類課題 (マウストラッカー課題)、作文課題 (怒り喚起操作)、絵画評価 (攻撃行動の測定)、質問紙という流れで実験を実施した。なお、本研究ではカバーストーリーを用いたため、課題終了後、本研究の本来の目的を口頭と書面で説明し、実験参加とデータの利用に関する同意書に改めて回答を求めた。

(3) **実験材料:** ① 攻撃への潜在的態度 マウスを用いた評価的評価課題を用いた。この課題では、コンピュータの画面中央にプライム刺激を提示したあと、注視点を挟んでターゲット刺激を画面中央に呈示した。そして対象者に、単語への評価 (ポジティブ or ネガティブ) に応じて画面上部にある 2 つのボタンのどちらかをマウスを使ってクリックするように求めた。プライム刺激として、ポジティブ語と攻撃語の各 30 語、ターゲット刺激として、ポジティブ語とネガティブ語の各 30 語を用いた。試行ごとに、刺激呈示から反応完了までの時間 (Reaction Time; RT)、刺激呈示からマウスを動かすまでの時間 (Initial Time; IT)、マウスの初期位置から正答ボタンへの直線と実際のマウスの軌道との面積 (Area Under the Curve; AUC) を測定した。② 挑発操作と攻撃行動の測定 先行研究に基づき、特定のテーマの作文をするように求め、それに別の学生が低い評価を付けることで挑発操作とした。また、攻撃行動の測定は、先に作文への

評価を行った学生の絵画を評価することで行った。③質問紙 作文への評価を受け取ったときに怒り感情 (2 項目, 6 件法), 過去の暴力経験 (8 項目, 4 件法) などを測定した。

**研究 2-1:** 研究 1 の結果を踏まえて, 潜在測度の刺激語を再度収集し, 質問紙調査を通して刺激としての妥当性を検討した。

(1) 調査対象者と手続き: 第 1 調査では, 大学生 70 名 (男性 25 名, 女性 44 名; 平均年齢  $20.00 \pm 1.30$  歳) を対象に質問紙調査を行った。第 2 調査では, 調査会社 ((株) Macromill) の保有するモニタに Web 調査を行った。最終的に 5,000 名 (男性 2,396 名, 女性 2,604 名; 平均年齢  $43.93 \pm 16.65$  歳) から回答を得た。なお, 各単語がどの程度攻撃的に 1,666 名, 各単語がどの程度ネガティブかに 1,667 名, 各単語がどの程度理解しやすいかに 1,667 名が回答するように参加者を割り付けた。

(2) 調査内容: 調査 1 では, 先行研究から合計 52 語の攻撃や暴力に関する単語を収集し, 重複する単語を削除して, 最終的に攻撃語 28 語を収集した。この 28 語を, 英和辞典を用いて邦訳した。この際, 一単語につき関連する日本語訳を複数作成し, 合計 140 語の攻撃に関する刺激語案日本語訳を作成した。このうち, 意味の重複する語や明らかに攻撃に関連しない語を除外し, 最終的に 99 語を選定した。これらの単語について, 各言葉が攻撃的に思える程度について回答を求めた (9 件法)。調査 2 では, 調査 1 の結果として得られた 50 語について, 各単語が攻撃的に思える程度, ネガティブさ, 理解しやすさについて回答を求めた (いずれも 9 件法)。

**研究 2-2:** 研究 2-1 で作成した刺激語を用いて, 攻撃への潜在的態度と攻撃行動の関連について検討した。

(1) 調査対象者: 大学生・大学院生 50 名 (男性 26 名, 女性 24 名; 平均年齢  $20.00 \pm 1.41$  歳)。

(2) 調査内容: ①攻撃への潜在的態度 攻撃への潜在的態度の測定には, 研究 1 と同様のマウストラッカーを用いた評価的分類課題を用いた。ただし, プライム刺激とターゲット刺激については, 研究 2-1 で作成した刺激を使用した。また, 研究 1 と同様に, 試行ごとに RT, IT, AUC を測定した。②攻撃行動 攻撃行動の測定に voodoo doll task (VDT; Dewall et al., 2013) を用いた。この課題では, 人形に刺した針の数を特定の人物への攻撃の測度として測定する。本調査では, 先行研究の手続きを参考に対象者の怒りを喚起し, その後人形に針を刺すように参加者に求めた。具体的には, まず対象者に, 他者に拒否された経験について思い出して書いてもらった。次に, 調査により生じた精神的な負担を解消するという名目のもと, 自分を拒否した相手に針を刺すつもりで任意の本数の針を人形に刺すように求めた。攻撃行動の指標は, 人形に刺した針の数とした。

**研究 3:** 研究 2-2 では, 過去に嫌な思いをした相手を想像する形で怒りを喚起し, 攻撃行動が生じやすくした。しかし, この方法では攻撃行動を引き起こすのに十分な怒りが喚起されたとは言いがたい。そこで, 研究 3 では, 先行研究でしばしば用いられる実験操作を用いて, 攻撃への潜在的態度と被挑発時の攻撃行動の関連について検討した。

(1) 調査対象者: 大学生・大学院生の男性 21 名 (平均年齢  $21.66 \pm 1.89$  歳)。

(2) 調査内容: ①攻撃への潜在的態度 研究 2-2 と同様の方法で測定した。②攻撃行動 攻撃行動を測定するために, VDT (Dewall et al., 2013) を行った。研究 3 では, 先行研究に基づいて対象者の挑発操作を行い, その後人形に針を刺すフェーズを行った。具体的には, まず対象者に特定のテーマで作文を書くように求め, その作文への評価に関するネガティブなコメントを対象者に読んでもらうことで, 挑発操作を行った。その後, 調査により生じた精神的な負担を解消するという名目のもと, 作文評価者に対して針を刺すつもりで人形に任意の本数の針を刺してもらった。研究 2-2 と同様に, 攻撃行動の指標は人形に刺した針の数とした。

**研究 4-1:** 攻撃スクリプトの活性を誘発すると考えられる攻撃的思考の抑制が攻撃行動を促進するかどうかを検討した。特に, 周囲からの目を気にして攻撃的思考を抑制することが, 攻撃行動に結び付く過程について検討した。

(1) 調査対象者と手続き: 調査会社 ((株) Macromill) の保有するモニタから 16 歳以上の男女を対象に Web 調査を実施した。具体的には, モニタに調査依頼を送り, 回答に同意が得られた場合のみ, 回答用の URL から回答を行うように求めた。最終的に, 7,562 名 (男性 3,571 名, 女性 3,945 名, その他 11 名, 無回答 35 名; 平均年齢  $42.6 \pm 17.0$  歳) を分析対象とした。

(2) 調査内容: ①攻撃的思考の抑制傾向 Nagtegaal et al. (2006) の White Bear Suppression Inventory-Aggression (WBSI-A) を日本語訳した 15 項目を使用した (5 件法)。②公的自意識: 菅原 (1984) の自意識尺度から公的自意識 11 項目を使用した (7 件法)。③攻撃性 安藤他 (1999) の日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の 24 項目を使用した (5 件法)。

**研究 4-2:** 研究 4-1 は, 攻撃スクリプト活性が思考抑制によって起こると仮定した検討であり, 実証性が乏しい。そこで, 研究 4-2 では, 先行研究に基づいて攻撃スクリプトを測定し, 攻撃的思考の抑制が攻撃スクリプトを介して攻撃行動を促進するかどうかをより直接的に検討した。

(1) 調査対象者と手続き: (株) iBRIDGE の Freeasy を用いた調査を実施した。調査は, 全国に居住する 18 歳以上 59 歳以下の男女を対象に依頼を行い, 参加に同意が得られた場合に,

回答用の URL から回答を行うよう求めた。最終的に、1,700 名から回答を得て、確認項目に適切に回答した 1,346 名 (男性 661 名, 女性 685 名; 平均年齢 37.1±13.1 歳) を分析対象とした。

(2) 調査内容: ①攻撃的思考の抑制傾向 研究 4-1 と同様の 15 項目 (5 件法)。②攻撃スクリプト Fernandez et al. (2022) と同様に, schedule of imagined violence (SIV) の項目のうち攻撃スクリプトリハーサルの頻度項目を表す 1 項目を使用した (7 件法)。③攻撃行動 13 歳以降の攻撃的行動の発生回数を評価する自己報告式の尺度である life history of aggression (LHA; Coccato et al., 1997) のうち, 攻撃的行動の経験を測定する攻撃性下位尺度のみを利用した (5 項目, 6 件法)。また, 本研究の調査研究者への攻撃行動を表す 10 項目をオリジナルに作成した (6 件法) などにも回答を求めた。④その他 属性変数など。

#### 4. 研究成果

**研究 1:** 各変数が攻撃行動を予測するかどうかを検討するために, 性別, 条件 (挑発あり vs. 挑発なし), IT, RT, AUC, 条件と IT の交互作用, 条件と RT の交互作用, 条件と AUC の交互作用を説明変数, 攻撃行動を目的変数とした重回帰分析を行なった。分析の結果, 挑発有無のみが攻撃行動に有意な影響を与えており ( $\beta = .50, p < .05$ ), 挑発がある条件はない条件と比較して攻撃行動が多かった。しかし, 性別, IT, RT, AUC, 条件と IT の交互作用, 条件と RT の交互作用, 条件と AUC の交互作用は, いずれも統計的に有意な影響を及ぼしていなかった。したがって, 研究 1 では, 攻撃への潜在的態度は攻撃行動を予測できなかった。この点については, いくつかの課題が考えられる。第一に, 暫定版として使用したマウストラッカー課題で使用した刺激語が十分でなかった可能性がある。第二に, 攻撃行動の指標に関して, フロア効果が生じており, 攻撃行動の指標として妥当でなかった可能性がある。こうした点を考慮して, 研究 2-1 では, 課題で使用する刺激語を再収集し, 予備調査を通してより妥当な刺激を作成した。また, 研究 2-2 並びに研究 3 では, 研究 2-1 で作成した刺激語を用い, かつ攻撃行動の指標を再考した上で, 攻撃への潜在的態度が攻撃行動を予測しうるかどうかを検証することとした。

**研究 2-1:** 調査 1 では, 先行研究から合計 52 語の攻撃や暴力に関する英単語を収集し, 重複する単語を削除して, 最終的に攻撃語 28 語の英単語を収集した。この 28 語を邦訳し, 合計 140 語の攻撃に関する刺激語案を作成した。意味の重複する語や明らかに攻撃に関連しない語を除外し, 最終的に 99 語を選定した。これらの日本語がどの程度攻撃的に思えるかについて回答を求めた結果から平均値並びに中央値が大きい順に 50 語を選定した。調査 2 では, 調査 1 で得られた 50 語について, 各単語がどの程度攻撃的か, どの程度ネガティブか, そしてどの程度理解しやすいかについて回答を求めた。最終的に, 第一基準として攻撃的かどうかの得点が高い順, 第二基準としてネガティブさの度合いが高い順, そして第三基準として理解しやすいの得点が平均値 (6.11 点) 以上の 30 項目を最終項目として採用した。研究 2-2 並びに研究 3 では, これらの項目を用いて攻撃概念の評価的プライミングの結果が, 将来の攻撃行動を予測し得るかどうかを検討することとした。

**研究 2-2:** VDT における針の本数について, 負の二項分布を仮定した一般化線形モデリング (generalized linear model; GLM) を行った。リンク関数は対数関数とした。説明変数は, 攻撃語プライミング時のネガティブ語分類試行・ポジティブ語分類試行それぞれにおける RT 平均値, IT 平均値, AUC 平均値及び性別とした。性別は, 男性が 0, 女性が 1 となるようにダミー変数化した。主要な結果を表 1 に示した。分析の結果, ネガティブ語分類時の AUC ( $B = 1.50, SE = 0.70, p = .03$ ) が統計的に有意であった。したがって, ネガティブ語の分類時の AUC が大きいほど, 人形に刺した針の数が多かった。研究 2-2 の結果を踏まえると, 攻撃に対する潜在的態度のネガティブさが低いほど, 攻撃行動を行いやすいことを意味する。

**研究 3:** VDT における針の本数について, 負の二項分布を仮定した GLM を行った。リンク関数は対数関数とした。説明変数は, 攻撃語プライミング時のネガティブ語分類試行・ポジティブ語分類試行それぞれにおける RT 平均値, IT 平均値, AUC 平均値とした。主要な結果を表 2 に示した。その結果, ネ

表 1 研究 2-2 の GLM の結果

	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>p</i>
性別	0.33	0.54	.54
ネガティブ語分類			
RT	0.00	0.00	.69
IT	0.00	0.01	.66
AUC	1.49	0.72	.04
ポジティブ語分類			
RT	0.00	0.00	.26
IT	0.00	0.01	.85
AUC	-0.58	0.44	.18

表 2 研究 3 の GLM の結果

	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>p</i>
ネガティブ語分類			
RT	-0.01	0.00	.04
IT	0.00	0.01	.66
AUC	0.78	1.35	.56
ポジティブ語分類			
RT	0.00	0.00	.29
IT	0.00	0.01	.62
AUC	-1.59	1.49	.29

ガティブ語分類時の RT が統計的に有意であった ( $B = -0.01$ ,  $SE = 0.00$ ,  $p = .04$ )。したがって、ネガティブ語の分類時のターゲット刺激を呈示してから対象者が反応を完了するまでの時間が早いほど、人形に刺した針の数が多かった。このことは、攻撃への潜在的態度がネガティブなほど、被挑発時に攻撃行動をしやすいことを意味する。この結果は研究 2-2 の結果とは一貫していない。研究 3 では、参加者の怒りを喚起するためにその場で挑発を行っており、プライミングの効果の大きさよりも挑発により喚起されたネガティブ感情の強さが強く結果に影響した可能性がある。これらの点について、今後さらに精査する必要がある。

**研究 4-1:** 周囲からの目を気にして攻撃的思考を抑制することが、攻撃行動に至る過程を検討するために、公的自意識を説明変数、WBSI-A を媒介変数、BAQ の各下位因子を目的変数とした媒介分析を行った。間接効果は、ブートストラップ法 (リサンプリング回数 2,000 回) によりバイアス修正 95%信頼区間を求め有意性を検討した。分析の結果、言語的攻撃については、公的自意識が直接的には言語的攻撃を抑制するが、攻撃的思考の抑制を促すことを介して、逆に言語的攻撃を促進していた。同様に、身体的攻撃でも、公的自意識が直接的には身体的攻撃を抑制するが、攻撃的思考の抑制を促すことを介して、逆に言語的攻撃を促進していた。さらに、短気では、公的自意識が直接的に短気を促進し、かつ攻撃的思考の抑制を促すことを介して、短気を促進していた。そして、敵意では、公的自意識が直接的に敵意を促進し、かつ攻撃的思考の抑制を促すことを介して、敵意を促進していた。なお、いずれの間接効果も統計的に有意であった (言語的攻撃 95%CI [0.02, 0.03]; 身体的攻撃 95%CI [0.07, 0.08]; 短気 (怒り) 95%CI [0.12, 0.14]; 敵意 95%CI [0.09, 0.11])。したがって、周囲の目を気にして攻撃的な思考を抑制するほど、攻撃的な行動が促進されると考えられる。

**研究 4-2:** 研究 4-2 では、先行研究に基づいて攻撃スクリプトを測定し、攻撃的思考の抑制が攻撃スクリプトを介して攻撃行動を促進するかどうかをより直接的に検討した。具体的には、攻撃的思考の抑制傾向が高いほど、攻撃スクリプトのリハーサルが多く、攻撃行動をより頻繁に行うと仮定した。また、先行研究に基づいて、攻撃的思考の抑制傾向の高さは、直接的に攻撃行動を促すと仮定した。すなわち、攻撃的思考の抑制傾向を説明変数、攻撃スクリプトリハーサルを媒介変数、攻撃行動を目的変数とした媒介分析を行った。間接効果については、ブートストラップ法 (リサンプリング回数 2,000 回) によりバイアス修正 95%信頼区間を求め有意性を検討した。分析の結果、攻撃的思考の抑制傾向は攻撃行動を直接的に促進していた。また攻撃的思考の抑制傾向は、攻撃的スクリプトのリハーサルを促進し、それが攻撃行動を促進していた。この間接効果の有意性について検討したところ、攻撃的スクリプトリハーサルの攻撃的思考の抑制傾向と攻撃行動の媒介効果は有意であった (95%CI [.06, .10])。したがって、攻撃的思考を抑制するほど、攻撃行動が直接的に促進されることに加え、攻撃的思考を抑制することが、攻撃スクリプトのリハーサルを助長し、それが攻撃行動を促進することが明らかとなった。

#### <引用文献>

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70 (5), 384-392.
- Coccaro, E. F., Berman, M. E., & Kavoussi, R. J. (1997). Assessment of life history of aggression: Development and psychometric characteristics. *Psychiatry Research*, 73(3), 147-157
- DeWall, C. N., Finkel, E. J., Lambert, N. M., Slotter, E. B., Bodenhausen, G. V., Pond, R. S., Jr, Renzetti, C. M. & Fincham, F. D. (2013). The voodoo doll task: Introducing and validating a novel method for studying aggressive inclinations. *Aggressive Behavior*, 39, 419-439.
- Fernandez, S. J., Daffern, M., Moulding, R., & Nedeljkovic, M. (2023). Exploring predictors of aggressive intrusive thoughts and aggressive scripts: Similarities and differences in phenomenology. *Aggressive Behavior*, 49(2), 141-153.
- Gilbert, F., & Daffern, M. (2010). Integrating contemporary aggression theory with violent offender treatment: How thoroughly do interventions target violent behavior? *Aggression and Violent Behavior*, 15(3), 167-180.
- Gilbert, F., & Daffern, M. (2017). Aggressive scripts, violent fantasy and violent behavior: A conceptual clarification and review. *Aggression and Violent Behavior*, 36, 98-107.
- Huesmann, L. R., & Eron, L. D. (1984). Cognitive processes and the persistence of aggressive behavior. *Aggressive Behavior*, 10(3), 243-251.
- Nagtegaal, M. H., Rassin, E., & Muris, P. (2006). Aggressive fantasies, thought control strategies, and their connection to aggressive behavior. *Personality and Individual Differences*, 41, 1397-1407.
- 大淵憲一 (2013). 人を傷つける心——攻撃性の社会心理学——サイエンス社
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 荒井崇史
2. 発表標題 攻撃・暴力的心理學：親密關係的暴力機制犯
3. 学会等名 2019年罪問題與對策國際學術檢討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒井崇史
2. 発表標題 攻撃的思考の抑制の逆説効果 White Bear Suppression Inventory Aggression日本語版の作成
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荒井崇史
2. 発表標題 攻撃的思考の抑制傾向と攻撃行動 大規模サンプルによるWBSI-A日本語版尺度の検討
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木香穂・荒井崇史
2. 発表標題 安静時心拍数と攻撃行動に伴う恐怖との関連 内受容感覚の効果
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荒井崇史
2. 発表標題 The risk factors of intimate partner violence.
3. 学会等名 2023年犯罪問題與對策國際學術檢討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>アウトリーチ活動情報</p> <p>荒井崇史（2019）．台湾法務部法務部長招待講演 「攻撃・暴力の心理学：親密関係で起こる暴力のメカニズム」，於：台北市・法務部 2019年10月30日</p> <p>荒井崇史（2021）．令和2年度仙台矯正管区調査・鑑別等実務研究第2回研究会講師 「攻撃・暴力の心理学 親密関係における暴力のメカニズム」 於：宮城刑務所 2021年2月18日</p> <p>荒井崇史（2023）．令和5年度仙台矯正管区調査・鑑別等実務研究第1回研究会講師 「攻撃・暴力の心理学 親密関係における暴力のメカニズム」 於：仙台少年鑑別所 2023年7月6日</p> <p>荒井崇史（2024）．令和5年度任用研修課程法務教官応用科研修講師 「犯罪からの離脱と予防 社会心理学的観点から見た犯罪・非行」 於：矯正研修所仙台支所 2024年1月25日</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川上 直秋  (Kawakami Naoaki)  (80633289)	筑波大学・人間系・准教授    (12102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	梅木 七瀬  (Umeki Nanase)		
研究協力者	鈴木 香穂  (Suzuki Kaho)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大塚 涼平  (Ootsuka Ryohei)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関